

スケールの大きなピアノ・トリオ・アルバムである。今年70才になるハロルド・メイバーンが、豪快かつ奔放にピアノを弾きまくっている。演奏されるのは、20世紀のアメリカを代表する作曲家、ハロルド・アーレンによって書かれたスタンダード・ナンバーばかりで、メンバーはこれらの名曲に一貫してダイナミックなアプローチをおこなってみせるのだ。折から2005年は、ハロルド・アーレンの生誕100周年にも当たっていて、同じ名をもつハロルド・メイバーンによる“ハロルド・ブレイズ・ハロルド・アーレン”という企画が、メンバーのほうから提案されたのだという。

ヴィーナス・レコードのハロルド・メイバーンのアルバムは、2001年の「恋に恋して」を皮切りに、ラテンやボサ・ノヴァ・ナンバーにもアプローチした「キッス・オブ・ファイヤー」(2001/12)や、ノラ・ジョーンズのヒット曲をタイトルにした「ドント・ノウ・ホワイ」(2003/4)、さらにアース・ウィンド&ファイアーのナンバーまで含む「ファンタジー」(2004/6)などがリリースされてきた。そういった流れからすると、ハロルド・アーレン集というのはジャズのオーソドックスな路線に立ち戻ったような印象を受けるが、注目すべきはやはりメイバーンのタッチが年を重ねるに従って、力強さと重厚さを増しているということだろう。年輪とともに表現に深みを加えてゆくミュージシャンは数多いけれども、メイバーンのようにますますパワフルに、若々しいブレイを繰りひろげてみせるピアニストというのは珍しい。“2001年の夏にアーチャー・シェップのアルバム「フレンチ・バラッズ」をレコーディングしたとき、シェップが連れてきたピアニストがハロルド・メイバーンだった。そのとき、良いピアニストだなと思ったんだけど、それで「恋に恋して」を制作しようということになり、スタジオに入って、完全にノックアウトされたんだ。強烈にピアノに向かってゆくような、あまりに凄い演奏に、圧倒されっぱなしだったね”と語るのは、プロデューサーの原哲夫氏である。ハロルド・メイバーンは1936年3月、テネシー州メンフィスの生まれ。54年からシカゴで活動をおこなったあと、50年代末からニューヨークでドナルド・バード、J.J.ジョンソン、ウェス・モンゴメリー、リー・モーガンら、一流プレイヤーたちと共演を重ね、歯切れよいタッチを聴かせてファンを獲得してきたメイバーンだが、ほんとうの意味で原氏が彼の実力を思い知らされたのは、このときが初めてだったという。

アルバム・タイトルになっている<虹の彼方に>の、ダイナミックな音楽展開の素晴らしさはどうだろう。1939年の映画「オズの魔法使い」の主題歌として、ジュディ・ガーランドが歌って大ヒットしたこの曲は、ふつうはリリカルなバラードとしてブレイされることが多い。多くのピアニストたちを含め、過去にさまざまなミュージシャンが、そのように<虹の彼方に>を演奏してきた。しかしここでのハロルド・メイバーンによるアプローチは、まったく異なったものだ。3拍子のワルツ・タイムを用いながらも、メイバーンはピアノという楽器をダイナミックにスイングさせ、ブロックコードを多く使った迫力あふれるブレイに終始する。たしかにメロディーの持ち味は生かされているのだが、曲そのものがスケール感を増して、新たに生まれ変わったような印象さえ受ける。<虹の彼方に>のメロディーをこんな風にブレイした例というのは、ほとんどなかったと言ってよいのではないだろうか。モダン・ジャズのよき時代の香りを残しながら、メイバーンはファンキーなフレーズをまじえ、確かなタッチで粘りのあるグルーヴを生み出してゆく。ジャズ・ピアノの伝統を生かしながら、歯切

Somewhere Over The Rainbow ~ Harold Plays Arlen

- 虹の彼方に
Harold Mabern Trio
ハロルド・メイバーン・トリオ
- 虹の彼方に
Somewhere Over The Rainbow (5 : 42)
 - スリーピン・ビー
A Sleeping Bee (7 : 44)
 - 夜のブルース
Blues In The Night (6 : 31)
 - アウト・オブ・ジス・ワールド
Out Of This World (6 : 24)
 - サバンナ
Savanna (4 : 11)
 - フーレイ・フォー・ラブ
Hooray For Love (2 : 57)
 - ストーミー・ウェザー
Stormy Weather (4 : 12)
 - アイブ・ガット・ザ・ワールド・オン・ア・ストリング
I've Got The World On A String (4 : 50)
 - ザ・マン・ザット・ガット・アウェイ
The Man That Got Away (7 : 04)
 - ジス・タイム・ザ・ドリームズ・オン・ミー
This Time The Dream's On Me (5 : 12)
- all songs by Harold Arlen

ハロルド・メイバーン Harold Mabern (piano)

ドウェイン・バーノ Dwayne Burno (bass)

ウィリー・ジョーンズⅢ Willie JonesⅢ (drums)

録音：2005年11月11日　　ザ・スタジオ、ニューヨーク

© 2006 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

*

Produced by Tetsuo Hara & Todd Barkan
Recorded at The Studio in New York
on November 11, 2005 Engineered by Katherine Miller
Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound :
Shuji Kitamura and Tetsuo Hara
Front Cover：© The Estate of Jeanloup Sieff / G. I. P. Tokyo
Designed by Taz

れ良い明快なフレージングを聴かせてくれるのは、まさに名人芸！　それはメイバーンというミュージシャンが持ち続けてきた、ジャズの体臭そのものであるとも言えるだろう。そこには近年の若いピアニストにはみることのできない風格のようなものも、ひしひしと感じられるのである。

ここで作品がとりあげられているハロルド・アーレンは1905年2月、ニューヨークのバッファロー生まれ。少年時代から教会の合唱隊などで歌い、ピアノを学んで15歳の頃、街のクラブのピアノ弾きとしてブレイをおこなうようになった。その後コンボをもって、歌手兼ピアニストとして仕事をし、1927年にニューヨークのクラブに進出。ブロードウェイのショーやミュージカルのための作曲家としても活躍するようになる。ハロルド・アーレンの名前が広く知られるようになったのは1930年、<ゲット・ハッピー>を書いてからのこと。アーレンが書いた曲は、親しみやすく、美しいメロディーをもつものばかりで、とてもポピュラーな魅力をもつナンバーが多いが、いっぽうではひねりのきいた通好みの曲もあって、そのあたりがアーレンの作風の面白さになっている。またアーレンは、ブルージーな感覚あふれるナンバーをいくつも作曲していて、そういった作品はまさにメイバーンのレパートリーとしてもびっぴりのものがある。ハロルド・アーレンは1987年に世を去ってしまったが、彼がのこしたメロディーの数々は、いまなお永遠の価値をもって光り輝いているのである。

ここでメイバーンをサポートしているベーシスト、ドウェイン・バーノと、ドラマーのウィリー・ジョーンズ」は、メイバーンとは親子以上にも年令の離れている若い世代のプレイヤー。フィラデルフィア生まれのバーノは、アルトのドナルド・ハリソンのバンドを皮切りに、多くの一流ブレ

イヤーと共演をおこなう一方、自身のクインテットも率いて活動を繰りひろげるトップ・ベーシストである。いっぽうジョーンズも、ホレス・シルバー、ロイ・ハーグローブ、ハービー・ハンコックなどの一流どころと共演を重ね、自身のリーダー・アルバムもいくつかリリースしてきている。ここでもシャープなジョーンズのドラミングがリーダーを触発して、演奏をよりエキサイティングなものにしているのが聴き逃せない。

<スリーピン・ビー>は1955年のミュージカル「ハウス・オブ・フラワーズ」の中のナンバーで、ジャズ・ピアニストではビル・エバンスの愛楽曲としても知られている。メイバーンは歯切れの良いタッチの中にファンキーなブルース・フィーリングを生かした、心地よいブレイに終始している。<夜のブルース>は41年に書かれた、同タイトルの映画主題歌。ブルース形式を拡大したような構成になっているところが、いかにもアーレンらしい、ひねった演出といえるのかもしれない。メイバーンのブレイからは、アフター・アワー的なリラックスした雰囲気が出てくる。<アウト・オブ・ジス・ワールド>は1945年の作品で、どこかエキゾチックな表情をもっている面白い曲。メイバーンはいきなりブロックコードを使って、ダイナミズムあふれるブレイに終始する。ここでの解釈は、ジョン・コルトレーン・カルテットによって62年に吹き込まれた同曲の演奏を思い出させるが、ちなみにそのときピアノを弾いていたのはマッコイ・タイナーだった。ここでもタイナーのブレイを意識してか、重厚なコードの響きを生かした、燃えるように熱い演奏になっている。

<サバンナ>は、ボッサ風のラテン・ビートとフォー・ビートとの交錯が面白い演奏。これはミュージカル「ジャマイカ」の中のナンバーである。<フーレイ・フォー・ラブ>は、48年のハリウッド映画「迷路」の主題歌で、ここではピアノ・ソロ

で演じられる。メイバーンは古典的なジャズ・ピアノのスタイルであるストライド風のテクニックもまじえながら、楽しく弾きこなしている。<ストーミー・ウェザー>は1933年のミュージカル「コットンクラブ・オン・パレード」の中のナンバー。ハーレムにあった“コットンクラブ”の宣伝を兼ねて作られたショーからのナンバーで、当時エセル・ウォーターズが歌ってヒットしたが、そのあと41年になってリナ・ホーンが歌って大ヒットさせた。メイバーンは、やはりブルージーなセンスを生かしたブレイを繰りひろげるが、途中にエロール・ガーナー風のタッチをはさんで、くつろいだ味も出している。<アイブ・ガット・ザ・ワールド・オン・ア・ストリング>も、同じミュージカルからの一曲で、歯切れよくメロディーを歌わせてゆくメイバーンの個性がよく出た演奏になっている。<ザ・マン・ザット・ガット・アウェイ>は55年の映画「スター誕生」からの一曲で、ジュディ・ガーランドが歌って大ヒットしたものである。さまざまな技巧を織り込みながら、心地よいスイングを聴かせるメイバーンの演奏には、ジャズ・ピアノの伝統が見え隠れする。<ジス・タイム・ザ・ドリームズ・オン・ミー>は、ふたたび映画「ブルース・イン・ザ・ナイト」の挿入曲。軽快なメロディーの提示からブロックコードへと、ダイナミックな展開がいかにもメイバーンらしい。ドラムスとのフォー・パースやベース・ソロも含めて、トリオのメンバーが一体になってグルーヴィーな雰囲気を描きあげてゆくのが、じつに素晴らしい。

岡崎　正通